

国土交通大臣 石井啓一 様
国土交通省九州地方整備局長 小平田浩司 様
国土交通省立野ダム工事事務所長 鶴木和博 様

立野ダムによらない自然と生活を守る会 代表 中島康
ダムによらない治水・利水を考える県議の会 代表 西 聖一
立野ダムによらない白川の治水を考える熊本市議の会 代表 田上辰也
代表連絡先 熊本市西区島崎4丁目5-13 中島康 電話 090-2505-3880

「立野ダム建設に係る技術委員会の 技術的な確認・評価」等に関する公開質問状(その5)

熊本地震で立野ダム予定地周辺の両岸が大きく崩壊したこと等を受け、国土交通省が昨年7月に設置した「立野ダム建設に係る技術委員会」は、同省の「熊本地震後もダム建設に支障となる技術的な課題はない」との主張をそのまま了承し、同省はダム本体工事に着手しようとしている。同省立野ダム工事事務所はこれまで、住民が提出した4通の公開質問状に何ら回答せず、住民が何度も要請してきた立野ダム説明会さえ一度も開催していない。

住民の疑問に直接答える立野ダム説明会の開催を再度強く要請するとともに、「立野ダム建設に係る技術委員会の技術的な確認・評価」等に関し、下記7点について公開質問します。これまでに提出した4通の質問状も含め、5月31日までの回答を求めます。

記

1. 大半が土砂崩壊した立野ダム水没予定地の土砂崩壊対策工事は不可能

「熊本地震後に現地踏査対象斜面として抽出された16地区については今後、必要に応じて対策工を実施することにより、湛水に対する斜面の安定性を確保できる」としているが、現状を見ると16地区の大半では、ダム水没予定地の底まで下りる道路がつくれぬ(資料1参照)。重機などを下すことはできないので、土砂崩壊対策工事は不可能ではないのか。また、立野溶岩の表面を覆う火山灰などの火山性堆積物を撤去しなければ湛水地すべりが発生するのは明らかである。16か所それぞれについて、どのような土砂崩壊対策工事を、どれくらいの工期で実施すると計画しているのか。

2. 崩壊土砂の搬出は不可能

「熊本地震後の状況を踏まえても、ダム完成までに土砂掘削等の必要な対策を講じることで、完成時においても洪水調節のために必要な容量を確保することは十分可能」としているが、ダム水没予定地に降りていく道路は、ダム本体予定地約300m上流の右岸側1か所のみである。ほとんどの崩壊地ではダムの底に降りる道路がつくれぬので、重機やダンプなどを下すことはできない。崩壊土砂の搬出は不可能ではないのか。30万m³の土砂搬出を、どのような方法で、どれくらいの期間をかけて搬出すると計画しているのか。

3. 立野ダム放流孔(高さ5m×幅5m)は流木の枝葉や根でふさがる

「熊本地震後の状況を踏まえても、放流孔内に流木や巨石が固定化されるような閉塞が生じることはなく、洪水調節能力にも影響がない」としているが、放流孔の上流側がスクリーンでおおわれるので、放流孔内に流木や巨石が固定化されないことは当然である。洪水時に流下する流木や、流木から外れた枝葉や根、その他の浮遊物が絡み合い、スクリーンの20cmの隙間に食い込み、貼りつき、ふさがるのは明らかである(資料2, 資料3参照)。貼りついた流木などが浮くことはあり得ない。模型実験では「川への流出過程で流木は枝葉の多くがとれた状態となる」として円柱材を使用し、スクリーンに貼りついた流木がダムの水位の上昇とともに浮くとしている。それならば外れた枝葉や根、その他の浮遊物も含めた検証や模型実験は実施しないのか。

4. 年間の立野ダムの維持管理費をどのように計画しているのか

「ダム完成後も、堆砂、流木、巨石及び斜面の状況について、湛水地内のモニタリングを行うとともに、その

結果を踏まえ、必要に応じて土砂の掘削や流木の撤去など、適切な維持管理を実施していく」としているが、平成24年の立野ダム事業検討時とは、けた違いに維持管理費が膨らむことは明らかである。年間の立野ダムの維持管理費をどのように計画しているのか。

5. 黒川遊水地群の洪水調節能力は毎秒何m³なのか

河川整備計画では、毎秒2300 m³の洪水を、立野ダムで毎秒200 m³、黒川遊水地群（車帰、無田、跡ヶ瀬、小野、内牧、小倉、手野）で毎秒100 m³洪水調節し、白川河道に毎秒2000 m³を配分するとしている。しかし、一般社団法人九州地方計画協会に記載されたレポート「黒川小倉遊水地について」には、小倉遊水地単独で毎秒140 m³の洪水調節能力があるとの記述がある。「黒川河川激甚災害対策特別緊急事業」により、河川整備計画策定時と比べ、特に小倉遊水地と手野遊水地は規模が大きくなっている。現時点の計画で、7つの遊水地それぞれの洪水調節量、7つの遊水地を合計した洪水調節流量は毎秒何m³なのか。県の事業でも、国交省は当然把握していない数値である。

6. 河川整備基本方針において立野ダムの洪水調節能力は毎秒何m³なのか

立野ダム工事事務所ホームページ等では、「代継橋地点における基本高水のピーク流域毎秒3400 m³を、立野ダムにより毎秒400 m³の洪水調節を行い、計画高水流量毎秒3000 m³に低減する」とあるが、河川整備基本方針では「流域内の洪水調節施設により毎秒400 m³を調節する」とある。立野ダムと黒川遊水地群で毎秒400 m³の調節をするのではないのか。「立野ダムにより毎秒400 m³の洪水調節を行う」という表現は間違っているのではないのか。毎秒400 m³を、立野ダムと黒川遊水地でそれぞれ毎秒何m³ずつ洪水調節するのか。

7. 北向谷原始林側のダム本体工事用のケーブルクレーン基礎をどのように計画しているのか

立野ダム本体工事のコンクリート打設で用いるケーブルクレーンは、右岸側からコンクリートを積み込むので、左岸側は移動可能な大規模なケーブルクレーンの基礎が必要となる。左岸側は天然記念物であり、阿蘇くじゅう国立公園の特別保護地区でもある北向谷原始林である。ケーブルクレーン基礎をどのように計画しているのか。

■これまで提出し、国交省より何ら回答を得ていない4通の公開質問状

立野ダム事業の放流孔の閉塞、堆砂に関する 公開質問状 平成25年10月1日

立野ダム事業の放流孔の閉塞、堆砂に関する 公開質問状その2 平成25年11月15日

立野ダムの穴の流木対策に関する公開質問状 平成27年11月26日

立野ダム建設に係る技術委員会に関する公開質問状 平成28年12月5日

(資料1)



熊本地震後の立野ダム水没予定地。大半が土砂崩壊をしている。
ダムの底まで下りる道路がつかれないので、重機やダンプが下せない。
土砂崩壊対策工事も、土砂の搬出も不可能である。(パスコ航空写真に加筆)

(資料2)



九州北部豪雨時の、黒川と合流前の白川(南阿蘇村) 2012年7月12日撮影
流木はもちろん、木の枝葉や根、その他の浮遊物がひっきりなしに流下している

(資料3)



九州北部豪雨時、流木等でふさがった下井手取水堰 2012年7月15日撮影
流木や木の枝葉、根、その他の浮遊物が絡み合い、堰に貼りついている。
当然、立野ダム放流孔のスクリーンの20cmの隙間に食い込み、貼りつくことは明らか。
食い込み、貼りついた流木などがダムの水位が上昇すれば浮くことは考えられない。

以上